

日本のこま 3

縁起のいいこま

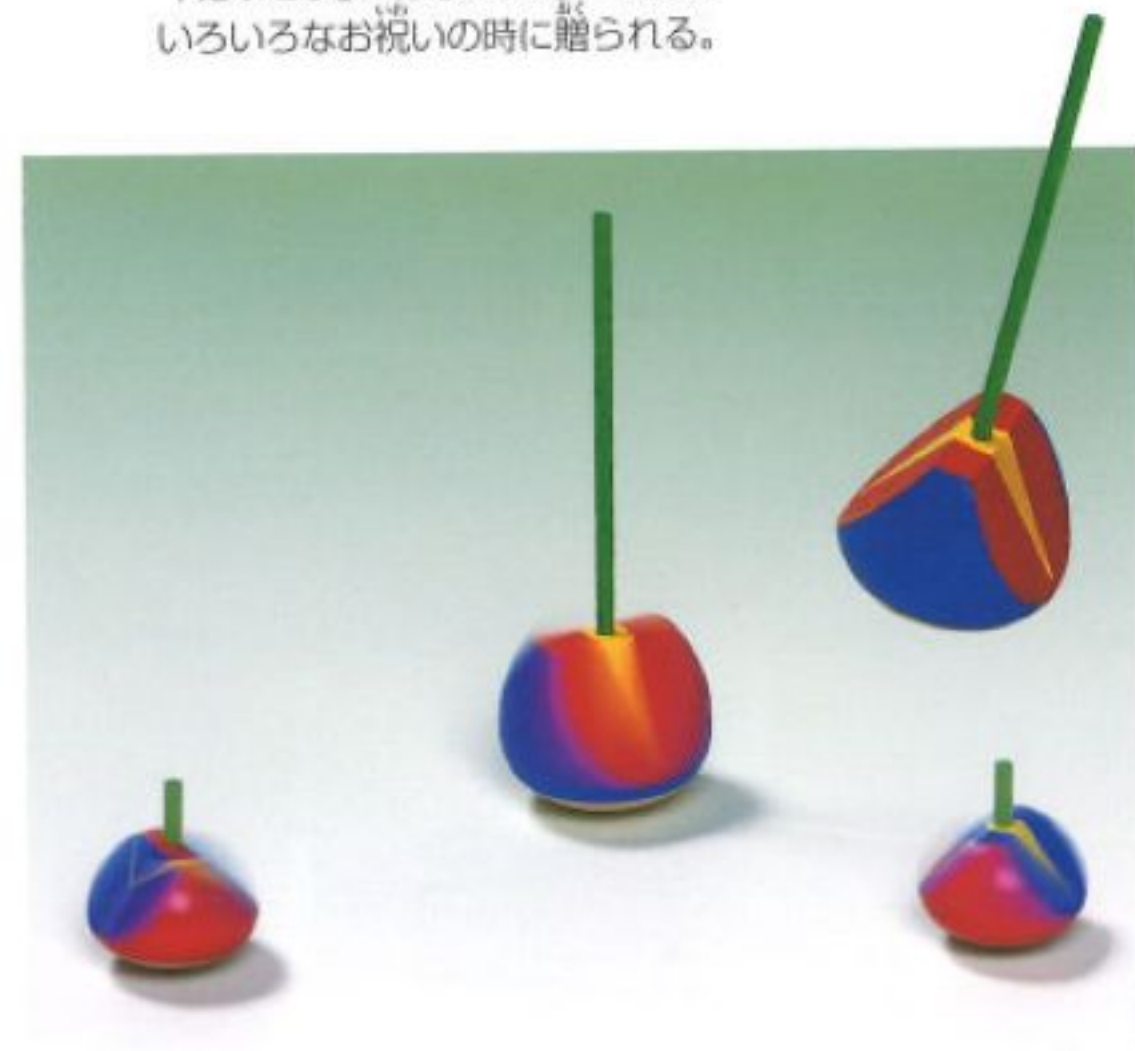
奈良・平安時代の宮中の儀式では、こまを回して吉凶を占ったといわれています。日本のこまは、昔から幸運や金運など、いろいろな運がまわってくる縁起のよいものとして大切にされてきました。



桜こま
「花嫁こま」、「夫婦こま」として、いろいろなお祝いの時に贈られる。



だるまこま
昔から縁起ものとして人気のあるだるまを描いたこま。さて、どうやって回すのでしょうか。(回し方は12ページ)



富士見こま
「一富士、二鷹、三なすび」といわれ、縁起のいい代表格の富士山。この山の形がうきでて見える。



ひょうたんからこま
この場合は「駒」だが、「意外なところから意外なものが現れる」という意味にひっかけて作った縁起もの。

変わったこま

日本のこまはこの他にもたくさんあって、とても全部はとり上げられませんが、ここでは、材質や作り方、回り方が変わっていて、おもしろいこまをいくつか紹介します。

瑪瑙こま

瑪瑙という幸運をよぶ宝石でできたこま。



段だんこま

こまの大きさを変えられるこま。小さくても大きくてもちゃんと回る。糸のこで斜めに切って作る。



バネこま

下についているバネが心棒の役目をする。ネジを巻いてボタンをおすと、ジャンプしながら音を出して回る。



ペイゴマ

ひもをかける心棒がないので、まくのが、たいへんむずかしい。関東地方などでさかん。



よくばりこま

強く手でもみ回すと、中から赤い翼が出てくる。回りが弱くなると見えなくなる。



電子こま

こまが台の中央を通るたびに、中の電磁石の影響で回転力が増し、電池が切れるまでずっと回り続ける。

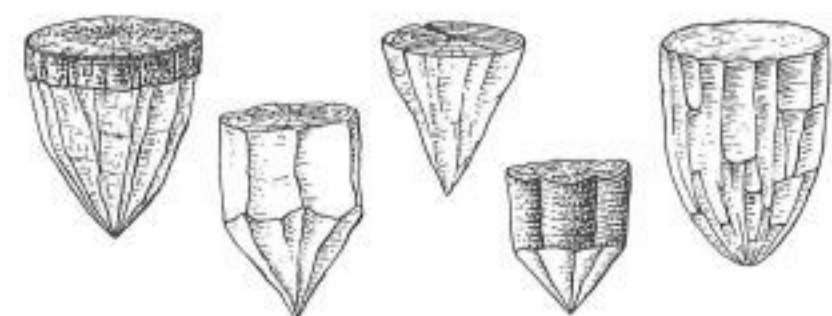


独楽の歴史

海外の独楽の歴史

古代エジプトでも遊ばれていた独楽

独楽の起源は、現在確認されている資料では、紀元前20～14世紀のエジプトにさかのぼるようです。G・W・グールドの書いた「コマ」(1973年)という本に、木を削って作った古代エジプトの独楽の絵が紹介されています。また、古代ギリシャの陶器の表面にも、男性や女性がたたき独楽を回す絵が描かれています。独楽は、何千年も前の時代から人びとによって作られ、遊ばれてきたのです。



エジプトの独楽／紀元前20～14世紀
(G・W・グールド「コマ」より)



ギリシアの壺／
独楽を回す女性が描かれている
(G・W・グールド「コマ」より)

ブリュゲルの描いた『子供の遊戯』(1560年)には、約250人の子どもたちが、約91種類の遊びをしている様子が描かれています。この中では、5人の男の子が2種類の独楽回しに夢中になっています。

フランスの自然科学誌『自然』(1895年)に発表された「19世紀のコマ」を見ると、この時代にはすでにさまざまな独楽が考えられ、作られていたことがわかります。

このように見てくると、独楽の歴史はたいへん古く、文化の伝承と同じように、たくさんの人びとの手と長い時間を経て、世界中に伝わっていったことが想像できます。



『子供の遊戯』
ブリュゲル画／油彩／
1560年／ウィーン美術史美術館蔵



19世紀の独楽(フランスの科学誌「自然」より)

日本の独楽の歴史

「独楽」という名前は平安時代から

日本を代表する伝承遊びの一つである「独楽」は、その種類と技の数では世界一といわれています。では日本の独楽は、いつごろから人びとに楽しまれてきたのでしょうか。

日本のこまが「独楽」という言葉ではじめて登場するのは、平安時代の初期に書かれた『倭名類聚抄』(931～938年頃)という書物です。この本によると、独楽は日本名を「古末都玖利」といい、穴が

あいているものだったと書かれています。

独楽は、すでに平安時代には中国から渡来しており、その形は、竹製の穴のあいた鳴り独楽(のちに唐独楽といわれる)だったようです。現在の「独楽」という名前は、この「古末」から、また、青森などの「ずぐり」という独楽のよび方は、後半の「都玖利」からつけられたといわれています。他にも、この時代に朝鮮半島を統一した「高麗」という国が、「高麗」とも呼ばれたことから、つけられたという説もあります。

このように文献の上では、10世紀はじめに登場する日本の独楽ですが、実際はどうだったのでしょうか。日本の各地の遺跡からは、7世紀から8世紀ごろのものではないかという木製の独楽(たたき独楽の形)がいくつか発見されています。このことから、日本の独楽は、奈良時代以前から人びとによって回されていたと考えられます。もしかしたら、もっと前の太古の時代から、木の実などが落ちて回るのを見て、自分たちの手で独楽として回していたのかもしれない。

江戸時代到大流行

奈良・平安時代の独楽は、主に宮中の儀式として回され、専門の独楽びょう師(儀式で独楽を回して吉凶を占う人)が、神事や仏事の余興として、紫のひもを使って回したといわれています。その後、だんだんと貴族階級の大人の遊びに変わって、実際に庶民の子もたちに商品として売られ、回されるようになったのは、江戸時代の元禄年間(1688～1704年)以降になってからです。

独楽回しは、江戸時代には、多くは大人の賭け事の道具として使われました。江戸時代に登場した「八方独楽」と呼ばれる八角面のひねり独楽は、サイコロの役目として使われたり、「銭独楽」という穴あき銭を数枚重ねて作った糸引き独楽は、寿命を競って回されたようです。

その他にも、「唐独楽」(ゴンゴン独楽とも呼ばれる)、「博多独楽」、「海螺独楽」(後にバイゴマ)、「鉄胴独楽」(鉄輪独楽ともいう)など、

